

エンタメ

週刊

文化功労者 * 舞台関係者

今年度の文化功労者が発表され、舞台関係者から4人が選ばれた。喜びの声を紹介する。(舞台取材班)

ダンサー
田中泯 80

心のまま踊る 世界で3000公演

緩慢に動く肉体から静かな気が立ち上る。世界のあらゆる場所で感じたまま即興で行う「場踊り」などの公演を3000回以上開いた。「僕の踊りは流行や競争と無縁。正直驚いてます」と榮譽はまぶしうだが、「踊ってきた国や場所とか、回数は前人未到かもしれません」。

東京・八王子で過ごした幼少期は神楽や盆踊りに「なぜか分からないが夢中になった」。バレエや現代舞踊を習うものの、疑問を感じて踊りの根源の探求に進む。「言葉を持つ以前、人間同士が感じ合うには踊りが関与したに違いないと思い始めた」

実践したのは、「地を這う前衛」。裸で踊るようになると国内では奇異に見られたが、パリの芸術祭で絶賛された。1985年には山梨県の山村に移住して農耕を始め、踊る体を作っている。

2002年の映画「たそがれ清兵衛」への出演以来、俳優の仕事が増えた。今年ヒットした映画「国宝」で人間国宝の女形を演じるために日本舞踊を習った。「よくぞ作り上げたと思える、ものすごく強固な体系がある。大変ですが、面白いので今も習っています」。探求の歩みは止まらない。



新内節三味線奏者 新内仲三郎 85

「風の盆」や「ファド」... 協働し広げた裾野



江戸中期に発祥した新内節は、男女の恋情をはじめ、人情の機微を三味線にのせて語る浄瑠璃。史上初めて、その担い手から文化功労者が誕生した。「びっくりしました。ありがたいことです」と柔和な笑みで語る。

1955年、叔父の新内仲造に入門し、「背筋がゾクゾクした」という三味線の音色に魅了された。洋楽にも関心があり、グループサウンズのボーカルとして誘いを受けたこともあったが、10代半ばで決めた道への覚悟を貫いた。

75年に新橋演舞場で開いた演奏会は、客席の通路や花道にも観客があふれた。しかし、「今は盛んでも、これからは先細ってしまうのでは」と心配し、その思いを原動力に富山の「おわら風の盆」やポルトガル歌謡の「ファド」なども協働。新内節の裾野を広げてきた。「やりたいことが次々と浮かび、どんどん実行した」と振り返る。

2017年に富士元派の家元を長男の新内多賀太夫に受け渡し、自らは宗家に。歌舞伎の作曲、芝居の出演と後継者の八面六臂の活躍に目を細める。

顕彰式当日も、式典の後に演奏の仕事に行く。これからも勉強です。芝居は生きていますから」

落語家 柳家さん喬 77

師の薫陶「芸より人磨け」今も



落語家が文化功労者に選ばれたのは、上方落語の桂米朝以来、2人目となる。「西と東で一人ずつ生まれて、若い方々への希望、勇気につながれば」と、はにかんだ様子で語る。昨年から落語協会会長となり、名実ともに現在の落語界を代表する大看板だ。

長年、海外に落語を普及させる活動に尽力してきた。「日本語が分からない方々の前で字幕なしで落語をしゃべらせていただいても、皆さん笑ってくださった。落語は日本だけのものではなくて、世界に通用する」と実感しているという。

「(林家)木久扇師匠は今年88歳。それまでまだ僕、十何年かある。『長生きも芸のうち』とおっしゃった大先輩もいました。できる限り頑張っていきたいと思っています」とほほ笑んだ。

劇作家・演出家・俳優 野田秀樹 69

「好き」の一心 気付けば50年



東京大在学中に劇団「夢の遊眠社」を結成。1993年に演劇企画制作会社「ノダ・マップ」を設立し、プロデュース形式で話題作を生み出してきた。「学生の時に芝居を始めて『芝居が好き』という一心で、舞台作品を作っていました。気が付いたら50年経って、『芝

居作り』以外なにもやっておらず、『芝居作り』以外に何の取柄もない人間になりました。この50年の間、すでに亡くなってしまった芝居仲間も含めて、たくさんの素晴らしい芝居仲間たちが周りにいてくれたので、こうして『文化功労者』になれました」と感謝のコメントを発表した。

劇作においては、言葉遊びをちりばめ、鋭い風刺性を身上とする。日本を代表する演出家として海外でも様々な作品を上演してきた。「悪ふざけに聞こえてはなりません、自分のやってきた拙い言葉遊びで、この『文化功労者』という言葉に報いるとすれば、『文化功労者=ぶんかこうろうしや』が、頑迷な『文化殺し屋=ぶんかころしや』にならないように、引き続き『芝居の道』を精進してまいります」